

杳目銅

いくつもの銅と銀を重ね合わせて
華麗な模様をつくりだす

「杳目銅(もくめがね)」という伝統的な金属工芸をご存知だろうか。銅や銀、金などの異なる金属板を重ね合わせ鍛接加工し、多彩な模様をつくり出す。その模様は金属でありながら木目のようであったり、大理石模様であったり、複雑で豊かな表情を持つ。いったいどのようにして、この独特な技法は生まれたのだろうか。杳目銅の製作活動を行っている秋田市の千貝工芸へと向かった。

秋田はかつて、多くの銅を産出した阿仁鉱山や院内銀山が存在したことから、銅や銀、金を用いた武具や装飾品がさかんにつくられ、その高い金工技術が息づいている土地である。

「杳目銅は江戸時代、秋田において独自に創られたものです。秋田藩お抱えの鑄師・正阿弥伝兵衛(しょうあみでんべい)が考案したとされています」

杳目銅の歴史について、千貝工芸の千貝弘氏はこう語る。刀の鑄師であった伝兵衛は日本刀の鍛造技術や漆の技法を、鑄の装飾に生かそうと杳目銅を考案したという。しかし融点の異なる金属を鍛接する杳目銅の製作は難しく、伝兵衛の死後、技法は途絶えてしまった。その後、明治期になって進藤鐵治氏が長年の研究により復元に成功し、以降途切れることもあったが、現在、数人が貴重な技を継承している。

「現在、杳目銅の技法は、材料の組み合わせ方や鍛造方法など、職人によってそれぞれやり方が異なり、各人各様の発想や工夫によって製作しています」

その技法は公に語られることはあまりないそうだが、千貝氏は快く教えてくれた。まず材料は千貝氏は赤銅か黒味銅、純銀等を選んでいく。

「金を使う職人もいますが、私は銅合金と銀を組み合わせていきます。たたいて延ばすためやわらかい銅はかかせません」



板の厚みは1.5mm程度で、仕上がりの模様を想像しながら、交互に金属板を数十枚重ね合わせていく。次に3~4cm程度の厚みとなった積層材料を金枠につめて固定し、フイゴ炉に入れ加熱し、目視によって融着が確認できたら取り出す。その後、たたいて薄く延ばし、その板の表面を削ると断層面が模様となって現れる。削り方によって模様は多様に変化し、ヤスリの角度を急にすると細かい模様に、ゆるやかな角度にすると大きな模様になる。さらに削った後でたたくと複雑な表情に変わる。

「製作の中で最も難しいのは鍛接です。融点の異なる金属を接合させるのは非常に難しく、炉から取り出すタイミングが早くても遅くてもいけない。タイミングを逃すとそれが剥離の原因となります」

炉から取り出すタイミングを千貝氏は「銀が飛び出し始めた頃」と表現する。それを見極められるまでには時間を要した。千貝氏が杳目銅を始めたのは40代半ば。当初は失敗が非常に多かった。

「もう少しで仕上げという段階で剥離が見つかって駄目になってしまったり…半分くらいは失敗していました。しかし失敗が多かったからこそ面白くなって、夢中になりましたね」

難しいものこそ挑みたくなるというのが職人氣質なのだろうか。杳目銅をはじめ約20年を経た現在、剥離はほとんどなく、9割以上は成功しているという。

それでも、とことん追求する千貝氏の姿勢は変わっていない。作品ができる度に「もう一手間加えていけば、もっと良い表現ができたかもしれない」と思い、再び挑戦したくなるそうだ。「これまで思い通りのものができたことは一度もない」と作品を見つめる目は厳しい。職人のあくなき追求があるからこそ、杳目銅はこんなに緻密で美しいのかもしれない。



金属工芸家

千貝 弘氏

ちがひ ひろし

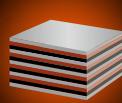
杳目銅が秋田で生まれたと聞いて「伝統を途絶えさせてはいけない」と40代半ばに杳目銅の製作活動を始めた。現在66歳。展覧会に作品を出品するかたわら、美術大学の学生などに工房を開放し、技術の伝承に努めている。

【日本工芸会正会員】

【主な受賞】秋田市文化選奨受賞、秋田県芸術選奨受賞、卓越技能者表彰(現代の名工)、黄綬褒章 拝受



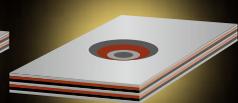
1 仕上がりの模様を想像しながら、金属板を数十枚重ね合わせる。



2 積層材料を固定し、フイゴ炉に入れ加熱。融着が確認できたら取り出す。



3 たたいて薄く延ばす



4 板の表面を削ることで断層面が模様となって現れる。さらにたたくと複雑な模様に変化する。